

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第二3:12~18 「取りのけられる顔おおい」

[12-13]「このような望みを持っているので、私たちはきわめて大胆にふるまいます。そして、モーセが、消えうせるものの最後をイスラエルの人々に見せないように、顔におおいを掛けたようなことはしません」

モーセの顔おおいに関しては→出エジプト34:29~35 モーセがシナイ山で主なる神と会見し、話したときに、彼の顔のはだが光を放つようになった。それで人々は彼を恐れ、近づけなかった。モーセは主が彼に告げられたことを、ことごとく彼らに命じ、語り終えたとき、顔におおいをかけた。これは人々に恐れを感じさせないための配慮とも思える。しかし今日の個所の13節を見ると、この顔のはだの輝きはいつまでも続くものではなく、段々と消えていくものであったことがわかる。それゆえ、その輝きの消えていく様子を人々に見られないように、顔におおいをするようになったのである。パウロはここでモーセを引用して、律法はモーセの顔の輝きのように時間とともに消え失せる一時的なものであり、福音に道を譲るべきものであったということと、その福音を宣べ伝えることの栄光は永続するものであり、それゆえ私たちはきわめて大胆に語るのだと言う。

[14-15]「しかし、イスラエルの人々の思いは鈍くなったのです。というのは、今日に至るまで、古い契約が朗読されるときに、同じおおいが掛けられたままで、取りのけられてはいません。なぜなら、それはキリストによって取り除かれるものだからです。かえって、今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心にはおおいが掛かっているのです」

顔おおいは、それをしている本人にとっては、外をはっきり見ることができない。パウロはこの顔おおいが、今日に至るまでイスラエル人に掛けられたままであると言う。会堂で安息日に律法が朗読され、多くのユダヤ人（イスラエル人）がそれを聞く。しかし、彼らはそれが何を意味しているのか本当の意味で悟ることができず、その霊的理解は鈍くなっていた。それは彼らの顔ではなく心におおいが掛かっていたからである。イスラエル人は今日に至るまでこのおおいのゆえに旧約の成就がキリストであることを悟ることができない。この「おおい」とは言い換えれば不信仰のことであり、それは神の御子、救い主イエス・キリストによってのみ取り除かれるものである。→ローマ10:4

[16]「しかし、人が主に向くなら、そのおおいは取り除かれるのです」

人は自分の努力とか良い行いとか戒めを守ることとか、そのようなものから目を転じて救い主イエス・キリストを見なければならぬ。その時、そのおおいは取り除かれ、救われるのである。→イザヤ45:22、ヨハネ3:16

[17]「主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります」

人が主キリストを自分の救い主として信じる時、主は御霊としてその人の心の中に来て、住んでくださる。そして内側よりいのちと力を与え、心から喜んで神のみこ

ころに従う自由をあたえてくださるのである。

[18]「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです」

これを神学用語で「聖化」と言う。もちろんこのようなことは一瞬にして起こることではなく、少しずつ進んでいくものである。これは自分の力ではなく、御霊なる主の働きによるものである。そして今も御霊は信じる者たちに働いておられ、その人をキリストご自身に似た者とされようとしている。

私たちは、このようなすばらしい救いを与えてくださった主に心から感謝し、まだこの福音を知らず、心におおいが掛けられている多くの人々に大胆に福音を証しし、宣べ伝えていく者になりたい。